

# あそ 12

2022



寄稿

亀田虎童子

東西線南北線の師走かな  
猪鍋の味の濃くなる山の闇  
俄寒む食後の薬忘れけり  
絶筆は明日か牡丹雪降る日かな  
なまぐさきもの白鳥の喉とほる

十二月集

さてと

佐藤 竹僊

きのふまで青柿さてと角曲る  
原發に原爆がくる地下に蟬  
空蟬と土偶と眼くらべかな  
空蟬に詰めこみすぎて毀れたる  
空蟬にならむと艸をのぼりだす  
空蟬が力盡きたるところに居

空蟬のすきさうなこと為てあげる  
人類に力あまりて文化の日  
のちの更衣この羽衣はだうしやう  
こもれ日のひとつひとつにいてふの實  
曼殊沙華赤いはうには黒揚羽  
鶏頭花満身創痕のごとくなり  
踏切を渡るかに飛ぶ秋の蝶  
踏切は日當りのよし秋の蝶  
踏切の脇に寄せられ冬の鳥  
だうしても踏切がある母の家



三日目も同じところに桐一葉

あたりにはその木の見えず桐一葉

あきさめの風をすこしくともなへる

前号訂正

あけやらぬ庭隅にほとめうが咲く

いづこから明りひろうてめうがの花

メタンガスが燃えてるやうに茗荷咲く

藪蚊には刺されもせずにめうがの子

前月「花茗荷」と発表しましたが会員より花茗荷は茗荷の花とは別種と指摘あり。依って。



## 旧芝離宮

## 都築繁子

天を指す娘の指に赤とんぼ

高層のビルが見下ろす松手入れ

どんぐりの飛んで転げて広き空

デパ地下の松茸売り場見てるだけ

秋色の生菓子友と午後3時

3年ぶり忙しく楽し秋祭



秋気

長崎桂子

十月や雲の光芒日はいかに  
露草や寝不足の眼を楽しめます  
庭点る輪唱を為す夜の虫  
雨止みて川辺きらきら芒かな  
秋桜群れ揺るるひたむきに有りたき  
堤防に勢揃ひして彼岸花  
五七五臙脂柿色秋の夕  
西風に山頂あらは秋気澄む

雑詠

森なほ子

家ひとつ灯るを見たり枯木星  
あてもなく握る鉛筆夜の長し  
草虱くっ付けしまま月曜日  
河原辺の小さきコスモス紅散らす  
河原辺に小さきコスモスはぐれ咲く  
秋日和人も疎らに地方都市  
二度咲いて淡きかをりの金木屋  
朝の道まだ踏まれないいてふの実



夜長

赤座典子

良質なドラマの余韻蘭の秋  
嗣治の白の温もり秋ともし  
爪切りて終る一日冬隣  
身に入むや通りに路地に更地増ゆ  
土井流の一汁一菜秋うらら  
透き通る粥の新米眩しかり  
手作りの固き干柿秋澄める

地鎮祭

秋川泉

寿ぎて初物づくし栗ごはん  
秋爽や神の降臨地鎮祭  
神主に飛蝗のとまる地鎮祭  
朝顔や風の変りて二輪咲く  
喧噪を抜けて野仏と曼殊沙華  
おしゃれ着を二枚着せたる案山子かな  
団栗を踏み締め上る切通し  
山の湯やあまたの星の流れ入る



味覚

七郎衛門吉保

谷間の稲架に掛け合ふ声響く  
稲架組んで逆さV字の黄金の穂  
老いた手も構はず止まる蜻蛉かな  
集まって走って食べて運動会  
味薄く目黒の秋刀魚恋しかり  
ビー玉に紅差すやうな柘榴種衣  
山頭火忌クーポン券の吉備団子  
朝寒にサブーサヴーの独り言

実むらさき

篠田純子

こぼるるもとどまるも紫式部の実  
恵比寿釣る鯛に触れけり里神楽  
大黒天の槌より駄菓子里神楽  
実むらさき我が身へ作る介護食  
くづし字の判読難し茸汁  
楽の音冴ゆ巫女舞の裳もの嬬やかに



シテイライト

篠田大佳

秋暮れていま永遠の雨の中  
宵闇や一等星しか知らぬ街  
罵声過ぎシテイライトを夜寒かな  
秋深し鞆にあふれプレゼント  
夢にみて異物の苦味秋の朝



貴船菊

須賀敏子

街ピアノ色なき風の中に聴く  
貴船菊咲けど戦禍の報止まず  
はらはらの新聞小説終わる秋  
秋日和三年振りに山車を曳く  
八重咲きの秋明菊の揺れる朝  
長薯のそつと置かれし玄関に  
水すこし少なめにして今年米  
十月の山を下りてフルーツパフェ



寒雷や話相手の猫を抱き 亀田虎童子

\*\*

空蟬をながく育てて母の老ゆ 佐藤 竹僊

ゆつくりとしゃべる山頂松虫草 須賀 敏子

曼珠沙華姉は明るく物忘れ

娘と見る今宵の月はとこしへに 都築 繁子

野分あとタワーは青くまばたけり

衰へぬ草の育ちや秋溽暑 長崎 桂子

枝豆の胸元に飛び見つからぬ 森 なほ子

洩るる灯を懐かしくして秋簾



揺らぎつつ鶺鴒色失せる月今宵 赤座 典子

旅支度終へし子と居る望の夜

一面に月射し入たる鄙の宿 秋川 泉

名月や提灯を消し畦の道

正倉院写し茶碗に名残りの茶 七郎衛門吉保

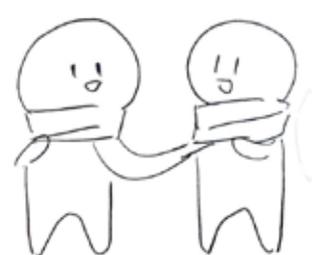
秋あかねツイット私の目の高さ 篠田 純子

水撒けば秋蝶秋蜂水飲み

天空の塔にとんぼの雨宿り 篠田 大佳

かさぶたのできない心風さやか

喜孝抄



コロナ禍や祭の寄付の来ずなりぬ

亀田虎童子

コロナ禍以後祭も中止になり、祭の寄付金を集めに来なくなつたと。このやうにコロナ流行以後、さまざまところで日常生活に変化が生じた。コロナ禍前と全く同じやうには戻れないのかも知れない。これほどコロナウイルスの影響が尾を引くとは。初期のころ「武漢ウイルス」などと中国が発生源ではと疑いをもたれたが、その中国でも日本と同じやうに苦しんでゐる。コロナの影響を祭の寄付の様を見てつくづく思はれた作者である。(喜孝)

筋書のなきが遊びや寒雀

亀田虎童子

突如空からぽとぽと雀が三羽落ちて来て、それもコロコロしたふくら雀で、可愛いらしくしばらく見入ってしまった。自動販売機の下から数羽出てきたこともありました。母雀から口移しで餌をもらっている子は、親ほどの大きさでした。「筋書のなきが」に、共感致しました。(純子)

生涯に梅干いくつ喰うたやら

亀田虎童子

ネットミーム(ネットの常套句)に、漫画の悪役が人命を軽んじていることに対して「今まで食

べたパンの枚数を覚えているのか」と啜う台詞があります。掲句と比べるのも失礼なのですが、「命を食べることはなんだろう」ということを考えさせられます。命を奪う重みが薄らいでいる今日、作者の血肉となった梅干しの生命を想います。(大佳)

テレビから妻の持唄缶ビール

佐藤竹僊

カラッとした、妻恋の句とします。この句の空気感がたまらなく好きです。(純子)

灼野原雀無口で移り行く

佐藤竹僊

焼け野原の非日常を人里に慣れた雀が、周囲に警戒しつつ、命を繋ぐために集中して黙して餌を探している光景が浮かびます。子鳥もおらず、ただ一羽で歩き回っている様子を想像すると、切迫した感じも伝わってきます。(大佳)

バイバイの後に広がる闇を蟲

篠田大佳

賑やかに過ごした時間と、別れてきた作者。現実も心の中も、大きな闇に包まれています。しかし蟲の音が、作者の心の空間をどんどん埋めて行きます。(純子)

お別れのバイバイは親しい者同士のあいさつ。「さよなら」の代りの「バイバイ」と。しかしこ

の句の「バイバイ」には明日への明るさを感じない。「バイバイ」のうしろに長いお別れが伺える。「虫」ではなく「蟲」と本字を使われた。印象的である。そしてこの句は私に遠い思ひ出を呼び覚ましてくれる。(喜孝)

夏逝くや「平和のための戦争展」

須賀敏子

「平和のための戦争展」を「平和を持続するために戦争を知る」という意味と「平和のための戦争」を展示している意味と両方考えてしまいました。こうした読みをしよう時代の危うさを思います。晩夏的情绪が人類の閉塞感を想起させます。(大佳)

桃が来た皮つきのまま食べてみる

須賀敏子

「桃が来た」とは何とも自然でよるこびの溢れた出だした。来た桃をそのまま皮をむかず口にした。自己の気持ちや物や行動に託して詠み、素敵な到来物へのそして素敵なお礼の句になってゐる。皮つきのまま食べた結果は良かったのだらう。(喜孝)

南瓜煮て美味しと思う敗戦日

都築繁子

敗戦日の「味」と現代の南瓜の味を比較して、「味」の変化を感じさせます。苦味を感じる時代から、甘味が強くなった時代への変化は、より良い「味」を目指す強いエネルギーを背後に感じさせます。(大佳)

爽やかやたまさか都電の新車両

都築繁子

青梅街道にも都電が走ってゐた。飾られた花電車が黄落の中を走り終へた。いま都電は一路線しか走ってゐない。その都電に乗るためにだけ私も出かけたものだ。車両はそれぞれ意匠をこらし町の中や家の裏を楽し気に走り抜けてゐた。ピカピカの新車両に乗り合わせた作者。爽やかな心地になられたことだらう。「たまさか」が表現に色を添へてゐる。(喜孝)

朝蟬や今日を励めと急き立てる

長崎桂子

一日を大事に過ごすという格言は、あらゆる人の言葉を借りて世の中に出回っています。朝蟬の声から、作者は今日を大事に生きることを思い出し、今日一日を必死に生きている蟬の声を聞き入ります。改めて今日一日を大事にしたいと思いました。(大佳)

汗ながる甘味を含み麦茶のむ

長崎桂子

ひと働きた時の汗であらう。お茶うけの甘味を口にし、冷えた麦茶、いや私なら沸かしたての麦茶がいいが。どちらにしても健康な喜びが伝はってくる。(喜孝)

枯るること忘れていたり蘭の花

森なほ子

蘭の花の鮮やかさに、この瞬間が永遠であるような感じがしたけれども、花はやがて枯れると気付かされる作者です。最近の画家は花が枯れる瞬間に関心があると、テレビで紹介していた記憶があります。衰える時間軸は今まで描かれなかったことですが、一つの命の物語として、注目されています。(大佳)

朝方の雨音はもう秋の雨 森なほ子

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

の雨版。朝起床されたときの繊細な感覚に雨の音を認めた。何時から降ってゐたのだらう。と思ひつつ雨の音に季の移ろいを感じられた。そしてその感触を素直に詠まれた。(喜孝)

秋天や樹海を分かつスバルライン 赤座典子

迷路の代名詞でもある樹海。そこを開発して有料道路にしてしまうということに対して、秋天の季語を当てたことで、樹海の持つ死のイメージが晴れていく感じがします。瓦礫を埋め立てて街を築いた日本の都市のような印象を覚えました。(大佳)

秋の蜂背もこもこと花つたふ 赤座典子

蜂にもさまざま種類があるが、この句の蜂は脚長蜂ではないやうだ。秋は特に花から花へ花粉と

蜜あつめに忙しい。花に頭を突っ込んでまはる蜂の秋の日の慌ただしさを「背もこもこ」で動きが見えてくるから不思議。(喜孝)

主義主張少し異なりまづ麦茶 秋川 泉

議論や主張の場で相手とのすれ違いを予感させながら、同時に麦茶を取ったという光景を想像しました。考え方は違うけれども、人間の普遍的な感覚に共感点を見出し、救いになっているように読みました。(大佳)

鉄骨を垂直に立て 晩夏光 秋川 泉

建造物の工事現場の光景を「鉄骨を垂直に立て」と象徴的に詠まれた。「鉄骨を垂直に立て」がそのあたりの様子を想像させてくれる。そしてただの工事現場の写生に留まらぬ作品になってゐる。晩夏の光の中にすつくと立つ鉄骨は見事である。(喜孝)。

誰が描くや黒一色の夏の富士 七郎備吉保

夏富士を通して水墨画の作者の中にある宇宙が見えてきそうです。現代の技術でも、白黒の写真の白黒の濃淡で色付けをするデジタル技術があります。黒一色の影絵でも、黒に濃い黒と薄い黒があつて、情報として見てもとても複雑な黒のグラデーションが見えてきそうです。(大佳)

独立峰の富士山。五合目から見る世界は写真などで理解してゐるが、行つてその場で見るのでは段違いだといふことは理解できる。作者は格別の感動もつて受け止められた。しかしその大景を詠まなかつた。正解かもしれない。「釣鐘草と」で作者の温かい心づかひを覚えた。(喜孝)

「土食つて虫食つて渋い」銀座に燕鳴く

篠田純子

燕の声の空耳でしょうか。調べてみると、有名な空耳らしく「土食つて虫食つて口渋い」というようです。確かに土も虫も渋い味がしそうです。この燕は銀座で安心して鳴くことができるよう、人に守られている燕でしょうか。(大佳)

法師蟬日比谷の水場錆にけり

篠田純子

「日比谷」は日比谷公園の謂。日比谷公園の水飲み場は明治期に開設された由緒ある遺跡。馬の水飲み場として知られてゐる。鶴の噴水は記憶にあるが、噴水の傍にあるといふこの水飲み場の印象がない。時とともに今は錆てゐるらしい。法師蟬の鳴きしきる中の古くて風情のある水飲み場、「錆にけり」と感慨を新たにする作者である。



## 月の土地

秋川 泉

「私、月の土地を買ったんですね」「姉にすすめられて、母と三人で」と我家に来られた業者の人の弁。お世話になりながら今ひとつの方が分らなかつた。しかし、この話で一遍にファンになった。月の土地を買つと云う途方も無い話は、聞いたことがあつたが、そんな粋狂な人もいるものだと思ひなかつた。ところが、その方の話は、とても素直に感じた。その方の家族皆で月を見ては楽しんでいられる姿を思つ。

すると、夫までが「月の土地を買つてみるか?!」と云い始めたのである。

そもそも《月》は一体誰のものであつたのか。そ

んな事は、この物語に対しては考える必要はないのか：と、月を眺めては思ひ、誰の考えたビジネスなのか：と、思ひ：しかし、そんなこととは関係なく、やはり月は美しいばかりだ。

月

篠田純子

藤原定家写本の、源氏物語を読む講座へ、通い始めた。今「夕顔」を読み進めている。八月十五日、月に照らし出された夕顔の住まいは、光の君にはもの珍しい様子である。明け方、近隣の米屋の石臼の「ゴロゴロと音を立てているのに、驚く源氏。」寒くとか、「景気が悪い」とかの会話も筒抜けである。原文に滲み出る、紫式部の好奇心、想像力、構成立は想定以上だ。



白帽子今日は諦め旅の夢  
溢れさせビール飲む夫夢の中  
夢でなしこのエムラルドペイト・レイク  
今は無き生家の夢の青き蚊帳  
夢吹雪醒めし静臥へ蚊の声降る  
段踏まず下りる夢見し夏終る  
葡萄食み少女の頃の夢をみし  
ねんねこに負へる児怖き「夢十夜」  
青あらし夢のつづきに笙の笛  
夢のつづき酒船石に温酒  
野に遊ぶ夢をみました春隣  
亡き人の幾人も居し春の夢  
春の夢利き足で出る墓の穴  
桜咲く夢の中までさくらさく  
さくらちる夢とうつつのいりまじり  
夢もつれ夢つなぎして明易し  
麦秋や見果てぬ夢はボケットに  
人間を夢見て十一月の鯉  
雁や鳴く未明の夢や妻子あり  
束の間の夢は終わりぬ牡丹雪  
春の昼嫌ひな小皿割れる夢  
マーカ―を持ちて車内の春の夢  
春の夢独逸国籍取得可能

須賀 敏子  
芝宮 須磨子  
須賀 敏子  
田中 藤穂  
渡邊 友七  
早崎 泰江  
山莊 慶子  
竹内 弘子  
松村 美智子  
佐藤 恭子  
須賀 敏子  
田中 藤穂  
佐藤 喜孝  
早崎 泰江  
芝宮 須磨子  
鎌倉 喜久恵  
後藤 志づ  
堀内 一郎  
渡邊 友七  
早崎 泰江  
東 亜 未  
赤座 典子  
佐藤 恭子

掌に少年の夢露ひかる  
花のもといねむる人の夢は何  
芍薬やわが日々の夢度しく  
イチローに夢を託して青蜜柑  
おいらくのまた夢を見む玉子酒  
耳元へ生死は夢と雪螢  
身籠りし夢の感触竜の玉  
身籠りし夢から覚めた羽根蒲団  
久しかり母と寝ぬ夢肩蒲団  
風邪に寝て幼き夢の中に住む  
赤子産む夢覚めし朝梅一輪  
夢うつつ春雷聞きし心地せり  
折紙のゴンドラ空へ夢飛行  
凜として銀の夢みる春の鷺  
大昼寝夢をおきざり乳の川  
理不尽な夢に声あぐ真夏の夜  
冬浅し夢のなかでも電子辞書  
ひとすぢの道をゆく夢炬燵にて  
はだれ霜腰紐赤き夢二の絵  
高熱や夢もうつつも色消えて  
ひとときを夢見てみたり春の宵  
千代紙を折る夢は何暮の春  
春の夜の夢の続きに夢二館

佐藤 恭子  
芝 尚子  
田中 藤穂  
赤座 典子  
堀内 一郎  
田中 藤穂  
齊藤 裕子  
齊藤 裕子  
佐藤 恭子  
渡邊 友七  
早崎 泰江  
芝宮 須磨子  
篠田 純子  
佐藤 恭子  
早崎 泰江  
田中 藤穂  
定梶 しよう  
田中 藤穂  
赤座 典子  
長崎 桂子  
芝 尚子  
森山のりこ

夢の間のソシアルダンス春の宵  
同じ夢くりかへし見て明易し  
終る夢残る夢あり明易し  
百才も夢でない世や雲の峰  
短夜の夢に病夫を追ひ歩く  
秋彼岸夢のつづきは見たくない  
夢多き児等の壁画よ秋日和  
母が逝く夢に起され鉦叩  
短夜の夢に病夫を負ひ歩く  
生姜湯に温もりつつも夢の中  
夢の中アブ・シンベルは冬青空  
残りたる芒黄色の夢に果つ  
金雀枝や夢に起こされ夢忘る  
行く春や銃は残酷夢であれ  
青野ゆく夢に道連れなかりけり  
夏期テスト0点の夢より醒むる  
夢にまで咳とたたかひ目覚めたり  
石畳牛車が軋む春の夢  
ちんどん屋吾れが笛吹く春の夢  
明易し夢に見し人覚えなく  
大いなる夢語る児と夏の雲  
明烏夢泡雪踊子草  
まどろみて見し夢忘れ藤の花

森山のりこ  
芝宮 須磨子  
赤座 典子  
木村 茂登子  
田中 藤穂  
芝宮 須磨子  
森山のりこ  
齊藤 裕子  
田中 藤穂  
森山のりこ  
須賀 敏子  
渡邊 友七  
東 亜 未  
長崎 桂子  
田中 藤穂  
田中 藤穂  
田中 藤穂  
長崎 桂子  
定梶 しよう  
定梶 しよう  
鈴木 多枝子  
吉成 美代子  
芝 尚子  
渡邊 友七

私にも百歳の夢夏ゆくや  
今日生れて永き夢見し蟬の鳴く  
額の手夢の母なり冷たかり  
おぼろげな夢の余白や冬の朝  
十二月起きてみる夢ただひとつ  
夢切れし闇は冬なりがらんだう  
初雪や百歳はもう夢ならず  
父の夢母に電話す冬の朝  
幼き日きれぎれ浮ぶ春の夢  
春の夢その奇抜さに戻りたし  
夫居るは夢にてありし春炬燵  
濡縁の一枚ゆるぶ春の夢  
短夜に続けて見たり母の夢  
絵画展知人の名あり夏の夢  
古代蓮咲いて束の間夢の国  
ましは酒一瞬奈落へ竦む夢  
ちちははの夢見たる朝寒卵  
日溜りに夢を見てゐる金盞花  
覚めやらぬ夢見心地に春の雪  
地図を手にまだうろうると春の夢  
河骨の夢見るやうな黄色かな  
夏の夢今走り出す高校児  
歩く夢みてゐる赤児シクラメン

堀内 一郎  
芝 尚子  
鈴木 多枝子  
芝宮 須磨子  
佐藤 恭子  
渡邊 友七  
木村 茂登子  
齊藤 裕子  
森山のりこ  
赤座 典子  
田中 藤穂  
佐藤 喜孝  
齊藤 裕子  
鈴木 多枝子  
森山のりこ  
森 理和  
篠田 純子  
長崎 桂子  
木村 茂登子  
赤座 典子  
須賀 敏子  
森山のりこ  
篠田 純子

## あとがき 原稿のお願い

### 「令和四年の私の一句」

自作のお好きな一句に文を添へてください。文字数自由。(二月末日)

### 言ひ訳のあとがき

十二月火曜日の句会後少し体調を崩した。風邪の前兆。水曜日のリハビリ、木曜日の検診をお休みにしていただらしてゐたら日曜日になった。『あを』の発行日も元に戻ってしまつた。少々残念。「吉凶は糾える繩の如し」とはよく言ったもの。私が布団の中でもたもたしてゐると、郵便受がポトンと音を立て亀田虎童子さんの作品を受け止めた。

『俳句』十二月号に「俳句の水脈・血脈」18回(角谷昌子)が掲載。後半に「師春一の足跡を回顧して」と亀田虎童子・小島良子両氏が寄稿してをられた。「晩年の春一は、弟子を育てるのがあまり上手くないと自省の言葉をもらしていたそつだ。」と書かれてゐた。「育てるのが上手くない」といふのは俳人として、作

家としてなのか。または俳壇に人材を押し出すことなのかはわからない。前者なら十二分に『暖流』は務めを果たされた。すぐに十指を折ることができる。きつと後者の事を指してゐるのだらう。俳壇といふ目から見ると蛇笏賞の瀧春一、現代俳句協会賞の高島茂しか目に入らないのかもしれない。ある時金子蛙次郎氏が傍に来て、「茂さんに喜孝さんを俳壇に売り出してあげたら」と進言したら、「もう立派に俳壇に名は売れますよ」と云はれちゃつたと、笑つてゐた。茂さんらしいなと思つた。《喜孝》

二〇二二年十二月号

発行日 十二月二十五日

発行所 〒177-0042

東京都練馬区下石神井一丁目六の三

サンハイツ石神井2 一階

電話 090 9828 4244

印刷・製本・レイアウト 竹僊房

カット/須賀忠男・福井美佐子・テイリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共) / 一年

ゆうちょ銀行(普) (店番018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)